

令和2年度 京都府立向陽高等学校 学校経営計画（スクールのマネジメントプラン）（計画段階・実施段階）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
○家庭や地域社会から信頼され、期待される安全・安心で魅力ある学校づくりを推進する。 ○一人一人の生徒の個性と能力を最大限に伸ばし、将来の夢や可能性を広げる確かな学力をつける。 ○知徳体美のバランスのとれた生徒を育成し、すべての生徒がよりよい社会の構築に貢献できる力をつける。	○1年次から家庭での学習習慣を身に付け、基礎学力を高めると同時に、探究活動、ICT、図書館の活用等を通じて主体的に学ぶ姿勢を育てることが肝要である。 ○身だしなみや挨拶等概ね良好な状態を維持できたが、自ら考えて行動できるようにすることが求められる。SNSの利用方法等、情報化社会に対応した規範意識もさらに高める必要がある。 ○地域や学校と連携したボランティア活動に多くの生徒が参加し、自己有用感を高めることができたが、裾野を広げることが必要である。 ○担任・教科担当・部活動顧問が相互に協力し、部活動を通して豊かな人格形成を行うことの継続が求められる。 ○主体的に進路選択ができるよう勤労観・職業観を育てるキャリア教育を推進した。大学入試改革等に対応した的確な進路説明会や面談の実施を継続して行う。	○学習指導要領の趣旨に沿って授業改善に努め、わかる授業、伸ばす授業を追究することにより、生徒一人ひとりの学習意欲を喚起し、確かな学力を育む。 ○挨拶の励行、遅刻の防止、正しい身だしなみなど基本的な生活習慣の徹底を図るとともに、自ら考えて行動する姿勢や高い規範意識を育む。 ○積極的な地域連携、校種間連携を進めるとともに、部活動やボランティア活動、読書活動等を推進し、積極的に挑戦する姿勢や自己有用感、社会参画意識を育む。 ○上記の各項目を推進するため、各分掌・教科の連携を図り、全教職員が一体となって効果的かつ組織的な教育活動を実践し、積極的に教育活動の公開や広報を行う。

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
学習指導	基礎基本を徹底して、わかる授業、伸ばす授業を追求し、学力を充実・伸長させる。	ICT機器の活用等、授業の改善に努め、生徒一人ひとりの学習意欲を喚起することにより、家庭学習時間60分以上を達成する生徒の割合を50%以上にする。	B	年2回の家庭学習時間調査では、全体として目標の「家庭学習時間60分以上達成する生徒の割合50%以上」達成した(第1回62%、第2回50%)。中だるみになりやすい2年生に家庭学習時間の減少傾向が見られる。さらに確かな学力を身に付けるための家庭学習習慣を確立できる工夫、また、自ら学習に向かう姿勢を作ることができるようなしくみを構築する。 教職員研修会で土曜授業及び週当たりの授業時間についてグループワークを実施、メリットやデメリットを確認した上で土曜授業は実施せず、1年及び2年文理コース32時間(週2回7限)、2年文コース及び3年は31時間(週1回7限)と決定された大枠の中で、「向陽高校生につけたい力」(令和2年度教職員研修会で作成)を定着させることができるよう、令和4年度入学生教育課程案を策定した。今後、ICT機器を活用するとともに、教科横断的な授業を展開できるよう、授業モデルを構築していきたい。
	新学習指導要領の趣旨に合致した教育課程を編成する。	令和4年度入学生に対する、新学習指導要領の趣旨に合致した教育課程及び土曜授業の在り方を検討し、実施案を策定する。	A	
生徒指導	問題行動の未然防止とともに、基本的な生活習慣の確立や生活態度の育成を図る。	生活習慣指導週間や教職員一斉登校指導等を活用し、教職員全体で挨拶やベル着、校内巡回等を行い、問題行動等の未然防止を行う。早朝登校(昨年度46名延べ79回)・スマートフォン等(昨年度40名延べ45回)・自転車(昨年度14名延べ16回)指導件数を昨年度より減少させ、繰り返し指導対象となる生徒を各5名以下にする。	B	遅刻については、繰り返し指導となる生徒が31名と非常に多く、指導方法について早急に検討していきたい。スマホ指導は27名27件と減少、自転車指導は16名17件とそれほど大きな差はなかった。生活習慣指導週間や教職員一斉登校指導は休校期間を除き、実施することができた。挨拶やベル着、校内巡回等は次年度も意識的に実施していきたい。問題行動や特別指導件数は昨年度とさほど変わらないが、行動や考え方の低年齢化が進んでいる傾向があり、手立ての必要性を感じる。 部活動については、コロナの影響で休校期間があったものの、全学年で79.5%の加入率となった。目標には達しなかったが、目的意識のある生徒が80%近く在籍していることが学校の軸の一つとなっている。ボランティア活動については、コロナの影響で軒並み需要がなく、全校生徒に対しての実施率は3%となった。次年度は現地での活動以外にできる支援活動等にも目を向けて活動を促していきたい。
	自主的・主体的に行動し、社会・地域貢献をする中で、豊かな感性を持った生徒を育成する。	部活動加入率を全学年で82%(昨年度80.6%)以上を目指し、目的意識のある学校生活を送らせる。ボランティア活動へ参加する生徒の実施率を全学年で45%(昨年度39.3%)を超えるように社会貢献意識の醸成に努める。	B	
進路指導	主体的に進路選択ができるようにするためキャリア学習、進路学習の充実を図る。	目的や目標から逆算し「今やるべきこと」を考えさせるキャリア学習・進路学習を充実させるため、3年間を見通した進路学習を計画する。特に、生徒一人ひとりに応じた学問や職業についての講話や学習会、外部講師を活用した講演会等を設定する。	A	臨時休校等で進路学習の在り方そのものを見直して実施した。特に2年生で『進路通信』を有効活用した。1年生で適性検査を活用し将来の進路を見つめさせる機会をつくった。保護者向けの進路説明会でも、休日の午前午後2回実施とするなど、コロナ禍においても進路指導を止めないように工夫した。 1・2年生に「活動記録ノート」を配付し、行事ごとの記録に活用するなど、有効活用に心がけた。3年生は独自のノートを有効活用し、自らの行動を記録することで、志望理由や面接、自己PRに役立てようとしたが、効果的な活用までは至らなかった。
	課外活動を含めた活動実績を蓄積し、生徒の強み発見に生かす。(ポートフォリオ型評価)	「活動記録ノート」をベースに、進路学習をはじめとして部活動、ボランティア活動等についても適宜記録させ、生徒自身による自己理解を深めさせるとともに、教員による生徒把握に役立てる。	B	
人権教育	自己と他者を尊重する態度を培う。	同和問題を始めとする様々な人権問題を扱い、正確な知識を獲得し、自らの行動指針を考えさせる。各教科等の教育活動の中で人権意識を涵養し、望ましい人間関係を形成する。	B	年2回の人権学習では、それぞれの発達段階や課題に応じた内容の講演や視聴覚教材での学習を進めることができ、教員・生徒の評価もよかった。年度末に人権教育研究会議を開催し、年間活動計画や人権学習のあり方、また教育活動全体を通じて人権意識の高揚に取り組んでいく体制づくりなどについて検討したので、その内容を次年度に生かすことができるようにする。
環境教育	環境教育の充実と学習環境の整備に努める。	日常の清掃指導を徹底するとともに、定期考査ごとの教室美化点検や広報活動を行い、生徒自らが学習環境を整える態度を養う。	B	日常の清掃指導を徹底し教室美化点検や広報活動を行った。また、教室にカン・ビン用のゴミ箱を増設し分別への意識を高めた。美化点検の回数をさらに増やしていきたい。
健康・安全	生徒自らが健康の保持増進ができるよう支援を行い、健康教育を推進する。	学校生活に課題を抱える生徒を早期に発見できるよう、全教職員から「気になる生徒」の情報を得られる体制を整える。	B	教育相談会議にあわせて、全教職員に「気になる生徒」についての調査を行い、情報をもとに学習支援につなげる等、一定の成果が見られた。次年度以降は、さらなる情報の共有が必要である。
学校図書館	図書館の機能で全ての教育活動をバックアップするとともに、読書に親しむことで自ら考え行動する生徒を育てる。	生徒が本に親しみ、自ら探究する活動につなげる機会となる「読書の時間」の実現と、生徒と図書館を近づける「Web O-PAC」の導入をし、本と生徒がつながる環境を整える。	B	蔵書検索システムを導入し、図書館の環境整備を大きく前進できた。また、時差登校時に「読書の時間」を実施できた学年があり、本と生徒が繋がる環境を持つことができた。ただし、全学年の実施には至らなかったため、今後も学年や教科と連携し、さらに本と生徒が繋がる取組を提案したい。また、「哲学対話」など教育活動に役立つ提案ができたことと、各教科とも連携したことで教科学習での図書館を利用した取組が増え、図書委員会活動も新たな取組を行うことができた。その成果がコロナ禍の中で貸し出し冊数が増えたことに表れた。今後も本を読む生徒を育てるために、図書部だけでなく学校全体で取り組む読書活動を提案したい。
		教職員・生徒に向けた広報活動、活発な図書委員会活動、教職員に向けた研修を行い、利用者目線に立った図書館運営によって読書活動を推進していく。	A	
危機管理	安心・安全で学習しやすい環境の整備	新型コロナウイルス感染症拡大などの学校危機に対し、校内の各分掌や外部機関との連携を図り、速やかに適切な判断や対応を行うことにより、安心・安全な教育環境を確保する。毎週1回は校内の安全点検を実施する。	B	校内の各分掌や外部機関との連携を図り、感染症対策としてサーキュレーターや換気扇、仕切りカーテン、飛沫防止衝立、ウインドエアコン等を設置し、またフェイスシールドや消毒液等衛生用品を整備して、安心安全な教育環境の整備を図った。施設設備の点検については、こまめに行っていたが、毎週1回の定期化には至らなかった。
家庭・地域社会との連携	教育活動の積極的な公開と広報を通して、地域に開かれた学校作りをおこなう。	特色のある授業や学校行事、活発な部活動などを、タイムリーにわかりやすく発信することにより、学校の魅力を中学生や保護者、地域など広く府民に伝える。ホームページを年間に100回以上更新することを目標とする。	A	ホームページ更新は200回前後、公式ツイッターを開設するなど、情報発信に努めることができた。さらに、本校の魅力をより中学生やその保護者に、また必要な情報を本校生徒や保護者に伝えるために、内容を充実させていきたい。

学校関係者評価委員会による評価
 コロナ禍で実施できない取組等が多く、また制限がある中での実施となる中で、学校経営計画の目標達成率が高く、学校評価アンケート調査の結果から見る生徒の満足度評価が75%を超えていること、保護者からの評価が昨年度と比べてそんなに変わっていないことは素晴らしく、学校のさまざまな工夫や手当が行われたことを表していると思われる。今年度の工夫が思った以上の効果を上げている場合は、次年度以降やコロナ禍が収まってからも生かすべきではないか。

次年度に向けた改善の方向性
 生徒に対して、学習の動機付けをしっかりと行い、学習習慣をきちんと身につけさせ、授業においてはより深い学びを追究する。生活指導面においては、指導目的を丁寧に伝え、言われて直すというのではなく、自ら考えて行動できる生徒の育成を目指す。また、1年次からの進路指導を大切に、希望進路の実現を図る。ボランティア活動の意味を考えさせ、より多くの生徒の積極的に参加を目指し、人格形成のための機会とする。